

論文審査の要旨 (甲)

申請者領域・分野 氏名	腫瘍制御科学領域 婦人科腫瘍学教育研究分野 氏名 水沼 慎人
指導教授氏名	水沼 英樹
論文審査担当者	主 査 松原 篤 副 査 佐藤 温 副 査 大山 力
<p>(論文題目)</p> <p>The pretreatment neutrophil-to-lymphocyte ratio predicts therapeutic response to radiation therapy and concurrent chemoradiation therapy in uterine cervical cancer</p> <p>(治療前の好中球/リンパ球比は子宮頸癌における放射線療法と化学療法同時放射線療法の治療的反応性を予測する)</p>	
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>子宮頸癌は婦人科領域の代表的疾患の一つであり、近年では若年者の罹患率が増加している。治療としては手術療法以外に放射線療法 (radiation therapy: RT) や化学療法同時放射線療法 (concurrent chemoradiation therapy: CCRT) など多様な治療が行われている。一方、簡単に測定できる血液中の好中球/リンパ球比 (neutrophil-to-lymphocyte ratio: NLR) は、子宮頸癌を含む種々の癌の予後因子となりうるということが明らかにされつつある。</p> <p>本研究は、弘前大学医学部附属病院で RT または CCRT で治療された子宮頸癌の患者を対象として、治療前の NLR により <2.5 群と ≥ 2.5 群に分けて、治療反応性を予測できるかどうかについて検討し、以下のような結果を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) NLR <2.5 群では、臨床病期が早く、腫瘍径も小さく、骨盤リンパ節転移なしの患者が多かった。 2) NLR <2.5 群では、complete response (CR) が得られた割合が有意に高く、NLR ≥ 2.5 群よりも治療効果が高かった。臨床病期別に検討しても、同様な結果であった。また、progression free survival (PFS)、overall survival についての検討でも、NLR <2.5 群の方が有意に良好であった。 3) 多変量解析の結果では、NLR 独立で CR および PFS 影響を与える因子であることが明らかとなった。 <p>これらの結果から、申請者は子宮頸癌において NLR が低いことが放射線治療の効果予測因子となり、予後の予測因子となりうることを明らかにしている。</p> <p>本研究は、子宮頸癌の治療前の採血の好中球/リンパ球という簡単な計測から、予後を予測し得ることを明らかにしたもので、この分野に資するところがあり、学位授与に値する。</p>	
公表雑誌等名	International Journal of Clinical Oncology 20: 989-996, 2015